

鎮守の森だより

NPO 法人 社叢学会ニュース

第 13 号

2005 年 1 月 11 日

社叢学会のさらなる前進を

～ 新春に寄せて ～

社叢学会理事長・京都大学名誉教授

上田 正昭

あらたまの年を迎え、おめでとうございます。平成 17 年が 20 世紀とは異なる、新世紀にふさわしい平和でいのちの輝く新生の歳となることを衷心より念じます。昨年は台風 23 号や中越地震をはじめとする災厄の連続でしたが、被害をうけられた会員の皆様をお見舞申し上げますと共に、1 日も早く復興が進み、お元気になられますよう祈ります。

平成 14 年の 5 月 26 日、京都の賀茂御祖(下鴨)神社の糺森研修道場に、内外の関係者多数が参集してスタートしました社叢学会は、今年の 6 月 4 日に名古屋で早くも第 4 回の総会ならびに研究大会を開催する運びとなりました。この間、ご理解とご支援をいただきました正会員・市民会員・賛助会員・協力会員の各位に篤く御礼を申し上げます。

定例の研究会は関西・関東・中部で有意義に開催されており、会誌『社叢学研究』はもとよりのこと、会報「鎮守の森だより」も順調に刊行されています。また社叢の大切さをわかりやすくガイドし、保護管理のできる人を養成することを目的とした第 1 回の「社叢インストラクター養成セミナー

(期・ 期)」も無事終了し、その第 2 回セミナーは本年の 6 月から次年度にかけて 期・ 期の日程で実施する予定です。

本学会のメンバーが中心となって編集・出版しました『身近な森の歩き方～鎮守の森探訪ガイド～』(文英堂)、『探究 鎮守の森～社叢学への招待～』(平凡社)も好評発売中です。

本年の 3 月 25 日から 9 月 25 日に、名古屋東部丘陵(長久手町・豊田市・瀬戸市)で開催されます「2005 年日本国際博覧会」(「愛知万博」・「愛・地球博」)には、本学会も「森に生きる日本文化」をテーマに屋外出展を中心とする事業に参画します。NPO 法人社叢学会愛・地球博出展実行委員会(委員長 = 藺田稔副理事長)が本格的に事業を推進していますが、会員の方々の絶大なご協力をお願いします。

社叢学会の活動は会員の皆様のご理解とご協力を得なければ、具体的なみのある成果をあげることはできません。ひとりでも多くの方々に入会していただき、ますます内容が充実して、あらたな前進ができますよう、一層のご支援を切望します。

土着の聖なる空間 沖縄の御嶽^{うたき}

～有形・無形の文化遺産～

講師 益田兼房（立命館大学歴史都市防災研究センター教授）
コメンター 益田寛子（早稲田大学大学院社会科学科博士課程）

土着信仰と御嶽 土着信仰は、地域の動植物や地形地物など自然環境のなかに多様な神霊を見だし、また人間の死後の世界を構想し、そこに死者の霊、祖先の霊を位置づける。沖縄の土着の信仰については、『おもろさうし』や『琉球神道記』などにもみえる、海の彼方の世界「ニライカナイ」が古代ヤマトでの遠い別世界をさす「根の国」と同じ用法であることから、仏教渡来以前のヤマトにも共通する信仰と考えることが可能である。こうした信仰は、15世紀の琉球王国の宗教祭祀面の支配組織にも組み込まれた。王の姉妹などが就任する「聞得大君(きこえおおきみ)」を頂点として、君々(きみぎみ)、大阿母(おおあも)などの中間支配職をへて、各村々の御嶽での祭祀を司る祝女(ノロ)に至る、全国的な神女組織が形成された。

村レベルでの御嶽の祭祀は祭政一致の統治の不可欠な要素となっており、直接の宗教行事は女性のノロが中心となっていくが、現実世界を支配する男社会もその祭祀を支えて、多くの公的な年中伝統祭祀行事を行ってきた。現在も、竹富島に限らず、沖縄の伝統的な集落では自治組織としての「公民館」があって、公的な年中伝統祭祀行事はこの公民館の行う重要な仕事となっている。そこでは、各家庭、集落、村の段階を通じて共通の世界観と宗教観念が共有されており、各自の家の床の間や位牌壇、屋敷の中の各所にいる種々の神々、道や集落内外の各所の神々など、すべての大小の聖なる空間は、地域社会に共有されたネットワークを構成している。

竹富島の御嶽と年中祭事 竹富島では28の御嶽が伝えられており、御嶽祭事は地域の自治組織である公民館が主催する。公民館は竹富島の政治的な取り決めを行う島の中心となる組織である。ここでは、ほとんどが農業の豊作を祈願する祭である。御嶽には、村オン、氏子に属する元の御嶽(ムトゥヌオン)、一族に属する個人的な御嶽があり、管理母体がそれぞれ分かれている。村オンは島民すべてが氏子であるとされる共通の御嶽だが、血族集団による氏子組

織が属するわけではなく、管理は公民館が行っている。血縁集団である氏子が属する御嶽は六つあり、六嶽(ムーヤマ)と呼ばれている。この六嶽は首里王府が編集した『琉球国由来記』などにも記録が残っており、王府に公認された六嶽の神司(カンツカサ=女性の神官)は、各自の属する御嶽だけでなく、村オンなど公的な御嶽や、公的な祭事での祈願を全般的に担ってきた。

年中祭事のうち、特に大きな祭では六嶽の神司が御嶽で一晩泊って祈願を行うが、これを夜籠(ユージュムリ)という。夜籠は特定の村オン3ヶ所でおこなわれ、六嶽の神司が2名ずつに分かれて担当する。ウブ(石垣などで囲われた御嶽の中の神聖な場所)の入口正面に建てられたオンヤ(御嶽の家、拝殿)の屋根の下に敷物を敷いて、供物を供え、ピーマチコウ(火待ち香)という線香を香炉に焚き、一晩中線香を絶やさずに祈願する。

有形・無形の文化財保護 沖縄県内の御嶽の保護対策をみると、グスク(城)が史跡的な遺跡として、分布調査や学術調査、指定や保護が各自治体レベル進んでいるのに対し、御嶽はまだほとんど対策が進んでいない。世界遺産になった斎場御嶽は、県指定の名勝であったのを、国指定では史跡として推薦条件を整えている。首里城の一部といえる園比屋武御嶽石門は、建造物として戦前から保護されてきた唯一の御嶽の事例であるが、国王の外出時の無事を祈る遥拝所としてのこの御嶽全体を保護するものではなく、周辺環境は別に史跡首里城の指定範囲に含まれることで保護されている。このほかでは、竹富島の重要伝統的建造物群保存地区およびその周辺の歴史的景観形成地区で、環境物件として多数の御嶽の指定がされ、その周辺の環境とともに保護されている。沖縄の御嶽信仰は、地域社会の本来の力は低下しつつあるが、伝統文化として保護し活用すべきものと意識されている。つまり無形の文化遺産である種々の伝統行事と、有形の文化遺産の御嶽などの聖なる空間は、貴重な文化的資源であるといえる。

次回予告(第14回関西定例研究会)

日時：2005年1月22日(土) 13:30～15:30
場所：ウィングス京都(京都市中京区東洞院通六角下御射山町262 075-212-7470)
テーマ：社叢の森と昆虫
講師：渡辺 弘之(京都大学名誉教授)

御杣山(みそまやま)の復元 講師 木村 政生(神宮評議員)
 伊勢の和船 講師 西城 利夫(伊勢河崎まちづくり衆理事)
 コメンター 林 進(岐阜大学名誉教授)

御杣山(みそまやま)の復元

御杣山はご遷宮の用材を切り出す山を指す。最初は伊勢神宮の宮域だけから切り出していたが、1019年に志摩に移り、1304年に全て切り尽して宮川上流の宮山へ移った。南北朝時代に宮山が南朝の北畠氏の勢力下に入ったことから美濃に移り、1585年の秀吉の時に流送の経費節減のために宮川上流の大杉谷に戻ってきた。1689年の遷宮の際には大杉谷の木を切り尽して木曾谷に移動し、現在まで木曾谷が神宮の御杣山として使われている。

造営上最も神聖な「心の御柱」は今でも宮域林から切り出している。面積は約5,500haで、五十鈴川の兩岸の幅60mは天然林として残している。管理は1923年に策定した基本方針に従っており、施業には知事を含めた神宮境内地保護委員会の審議が必要で、10年毎の経営計画策定は伝統的に東京大学の森林経理学教室が行っている。材積は1923年当時の約3倍になっており、保水性の良い緑のダムとなって、1991年の大雨でも大水が出なかった。

式年遷宮の際に必要な用材の量は、景気の良かった1929年の注文書では材積9,800m³で、1889年は宇治橋の用材も入れて8,000m³であった。2013年の第62回遷宮では8,500m³が必要とされており、内2,500m³は宮域林から出す予定である。

宮域林のヒノキ林は現在約2,500haで、九州に明治100年記念林1,000haがあり、1回の遷宮に用材約66ha分が必要だと計算すると、3,300haが確保されれば、50回1,000年分。将来は神宮宮域林のみで造営用材を賄えると計算している。

一方、胸高直径が1mを超えるヒノキがなくなってきた。正殿の扉材は四尺の一枚板となっており、胸高直径142cmの立木が必要で、現在の宮域林にはない。木曾谷のヒノキは胸高直径140cmになるのに800年かかっている。伊勢では160年で直径1mに育つ場所がある。土地条件の良い所に良い木を植えて、植林後20年に強間伐で孤立木にして枝葉を繁らせて光合成を盛んにすれば、肥大成長

することが分かっている。年輪幅が広がっても横断強度は変わらない。300年後には大きな用材も宮域林から出せると考えている。一方、宇治橋の橋脚にはケヤキが使われているが、植林されたケヤキは材木にならない。ヒノキを強間伐すると林間にケヤキ等の郷土種が生育し、ヒノキと競合させた方が成長も良い。社叢を守り育てることが、資源も環境も風致も精神文化の伝承も確保できることになる。

伊勢の和船の復元

社叢も和船も使われなくなった時に、技も人もいなくなる。伊勢大湊は海洋国家日本の源で、中尊寺の構造材には石垣島産の檜が使われているように、八重山と奥州をも結ぶ重要な拠点であった。

伊勢船は15世紀頃から使われ、和船には一般的に先端に水押し(みよし)があるが、伊勢船の先端は箱形で、川船としての古い形を残している。復元の目的は、船大工の高齢化で造船過程を記録に残す必要があったことと、船参宮の体験や川沿いの文化の復元によって、新しい伊勢の顔づくりを目指した。

伊勢は古代から船との関係が深く、大湊には宮川・勢田川・五十鈴川が合流して、中世から大型船の造船場があった。あかつ(津市)は日本三大津の一つとして幻の港と言われ、古代から大きな船を造っていた。大きな船を造るためには、大きな材木が必要で、伊勢には奥深い山があり、木材を街まで運びやすかった。神宮と荘園を海路で結んだり、中世には鳥羽-鎌倉間の取引も多く、船参宮の客や旅館用の物資を運んだり、昔から船の需要が大きかった。

また、伊勢神宮の御用材の残材などの木を使った産業や伝統工芸が盛んで、伊勢春慶や参宮土産として作られた伊勢玩具(ヨーヨー、コマ、ケン玉など)は有名である。板を金槌でたたいて締め付けると隙間がなくなり水が漏らなくなるという「すり合わせ」の造船技法は、宇治橋の橋板にも使われている。

今後は、木造船の定期運航も視野に入れて、木を高度に利用した木造船の技術を伝承することが、地域の活性化に繋がると考えている。

次回予告(第4回中部定例研究会)

日時：2005年2月12日(土) 13:30~16:00

場所：三河一宮砥鹿神社参集殿(愛知県宝飯郡一宮町一宮西垣内2 0533-93-2001)

テーマ・講師：「砥鹿神社の社叢」 二橋 一彦(砥鹿神社宮司)

「一宮と国府の関係」 林 文一(一宮町文化財審議委員会委員長)

「神社の森を守る」 桑原 将人(一宮町教育委員)

コメンター：林 進(社叢学会副理事長・岐阜大学名誉教授)

事務局から

- 謹んで新春のお慶びを申し上げますと共に、会員の皆さまの益々のご健勝をお祈り申し上げます。トリ歳の「酉」は酒器の形からきているといわれ、酒飲みには誠に有難い字ですが、「鳥」の字は自然現象の先触れや人間生活の教訓、警句にも幅広く用いられています。「鳥が高い所に巣を作れば大雪がある」など。地震・台風・大津波と自然災害の多かった昨年、ことしは穏やかな歳であって欲しいものです。本年も何卒よろしく学会活動にご協力賜わりたくお願い申し上げます。

研究発表者募集！

| | |
|------|--|
| テーマ | 社叢に関する理論的研究 社叢の保存・拡充に関する実践的調査研究 |
| 発表時間 | 20分(報告15分+討論5分) |
| 応募締切 | 平成16年2月末日必着 応募者は住所・氏名・職業を明記の上、発表内容を300字～400字にまとめて事務局(京都)に御送付下さい。 応募者多数の場合は研究発表審査委員会で審査し、3月末に採択通知を致します。 採択が決定し、大会当日に配布する資料は4月末までに事務局に御送付下さい。 |

- 平成17年度の総会ならびに研究大会を6月4日(土)に名古屋市(会場未定)で開催いたしますが、当日の研究発表者を下記の要領で応募中です。奮ってご応募下さい。
- 昨秋に平凡社より刊行しました『探究 鎮守の森』(定価2200円 送料込み)は大変好評です。購入ご希望の方は事務局へお申し込み下さい。

編集後記

大晦日に時ならぬ雪！ 天変地異の多かった2004年を象徴するような年末でした。今年は平穩であってほしいなあと思いつつ、頂いた年賀状を眺めていると、某理事からの「勝負だ！！」だって。はいはい、いよいよ愛・地球博開幕目前だからがんばれってことでしょ！ でもねえ、“未定”がこんなに多くていいのかしらとちょっと不安。ま、そのうち何とかすりゃええんでしょうが。と一夜漬け受験生モード。う～ん。

十年振りの京都の冬。昔はそれほど感じなかったんだけど、つくづく京都は裏日本だなあと思う。朝、大阪の家を出るときはからりと晴れた冬の日なのに、京都についてみたら、どんより曇った冬の空。気がつくとはらばらと時雨れているし... 北の山は真っ白だし。京阪神は一つならぬ一つひとつと言われるのも無理ないなあ。

暮には歩くのも困難なほどの人出だった錦市場も、年明けはさすがに休みの店が多く、観光客もちょっと肩透かしの様子。まだお正月気分の京都ではあります。

(藤岡 郁)

次回予告(第8回関東定例研究会)

日時：2005年2月12日(土) 14:00～17:00
場所：國學院大学・渋谷キャンパス 120周年記念1号館1103教室(渋谷区東4-10-27)
テーマ：社叢と文化財建造物の保存
講師：日塔 和彦(文化財建造物修理技術者)
コメンター：川村 昭二(日本建築工芸設計事務所代表)

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区蛸薬師通堺町西入雁金町373番地
みよいビル303号 TEL075-212-2973 FAX075-212-2916
URL <http://www2.odn.ne.jp/shasou/> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp
社叢学会関東支部 〒171-0021 豊島区西池袋2-36-1 ソフトタウン池袋1101
TEL03-5950-6507 FAX03-5950-5184 E-Mail shasou@macrovision.co.jp